

(朝日新聞出版・1944年)



て、吉田茂、石橋湛山、岸信介といった戦後保守の源流に遡り、日中・日韓関係を中心にアジア外交の歴史をたどり、アジア観の変遷を整理していく。

戦後70回目の夏がまもなくやってくる。第2次安倍政権の発足以降、アジアとの関係は必ずしも良好とはいえないが、日中首脳会談が実現し、日韓関係にも多少なりとも改善の兆しがみられる。それだけに、戦後70年の首相談話が注目される。

筆者は新聞記者としての取材体験も踏まえ、『戦後保守のアジア観』(1995年)に大幅に筆を加え詳細に論じていく。前著の倍近い四〇〇ページを超える大作となった。戦後政治をけん引してきた保守政治家たちは、アジアをどのように捉えてきたのか。

この問いに答えるには、自民党内の権力構造を解析し、保守政治の論理を理解する必要がある。憲法改正や安全保障をめぐるタカ派とハト派の党内対立が表だって論じられることが多いが、こと外交に限っても、親米と反米、中国派と台湾派、韓国や東南アジアとの関係などをめぐる対立、思想の違いは多様であることを押さえておく必要がある。筆者はそれを十分に踏まえ

戦争を正当化するような発言で物議を醸す政治家が後を絶たず、首相の靖国参拜、歴史修正主義やA級戦犯合祀が繰り返し国際問題化してきた。その源には、戦後の始まりからアメリカへの敗戦という意識はあっても、アジアを侵略したという認識が希薄だったことがある。では、現在の安倍政権はどうか。筆者は、祖父・岸信介にあって安倍首相にないものは、「アジア主義的な感覚」であると分析する。アメリカへの共感強いが、アジアに寄り添う姿勢が見えづらいのだ。

本書を通読すれば、戦後保守政治のアジアをめぐる路線対立が実に多様であったことが分かる。保守には本来さまざまな思想が同居していたし、それを認め合う寛容さこそが保守の真髄でもある。戦後保守の多様なアジア観を追った本書は、本来の精神を失いつつある現在の保守への警鐘でもある。

(九州大准教授 大賀哲)

わかみや・よしづみ 1
948年生まれ。元朝日新聞記者。著書に『新聞記者 現代史を記録する』など。

若宮啓文著

戦後70年保守のアジア観